

に行く、先生が生徒を連れて来るというやり方で、コーチ陣を揃えて全国規模のテニス教室はその後50年ほど続いた。

初めての海外遠征（1960年 38歳）

協会から渡された一人25ドルの外貨を手に男子2人、女子2人が、インドネシアへ向け羽田を飛び立ったのは12月半ばを過ぎた頃だった。現地は夏で到着した

翌日からもう試合だった。それも朝7時から始まって10時までが午前の試合、お昼寝の時間があり、午後は3時半から再開する変則スケジュールにびっくりした。男子シングルス以外は全て日本の勝利で、アジアの中でこれくらい強いのだということが確認でき、嬉しかった。しかし男子のように世界へ出て、世界のトッププレーヤーを見たり、戦ってみたいという私の思いは満たされなかった。

初めてのデ杯見物と全豪オープン初出場（1964年 42歳）

「どうしても外国のトップ選手のプレーが見たい」と言う、鵜原謙造さんが「オーストラリアのデ杯決勝を見に行こう」となり貨物船で行くことになった。甲板で毎日テニスをして過ごした。

決勝戦観戦後シドニーで大会があるとのこと、シドニーに回り、直接交渉して予選に出させてもらった。芝のコートに戸惑っている間に試合は終わり1回戦負けであった。ところが40年も経ってから、記録を整理し



ていたテニス関係者からそれが全豪選手権の本戦だったと知らされた。未だに信じられない。

優勝したマーガレット・スミス選手（コート夫人）のプレーは衝撃的であった。ミスバンドする芝でどうしてもあんなに上手くプレーできるのか。これが女子の世界のトップなのか。まるで男のようなパワーテニスにただただ唖然とした。私のテニス人生最大のショックな出来事だった。

初めてのフェデレーションカップ（1964年 42歳）



前年から始まったフェデレーションカップ（アメリカ開催）に宮城黎子・黒松和子・小幡陽子の3人が派遣されることとなった。国際交流が少なかった女子にも、やっと光が当たり始めた年だった。当時の参加国は

19カ国、芝のコートでの初戦は南アフリカが相手で0-3と負けてしまった。

全豪も全米も全英も芝。日本にない芝のコートで戦うにはどうしたらよいか、随分考えさせられた。

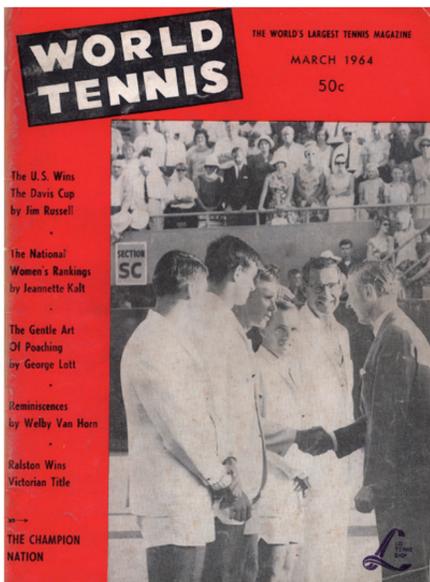
ストリングスもその場で張るために、1台30万円もするガット張り機をドイツ製とアメリカ製の2台購入した。T2000が出たときは困った。張り方がわからない。アメリカから張ったものを持ってきたお客から見せて貰いようやく張れるようになった。

伊勢丹の服飾研究所の協力で、新しい生地の開発にも挑戦した。当時はワンピース全盛時代。

デザインのラフを自分で起こし、子供用のサイズ7から大人用の15まできめ細かくサイズを分けたのも人気を呼んだ理由だった。

初めてのテニスショップオープン（1964年 42歳）

世界でもまだテニス用品の専門店はまだあまり見られなかった時代に、新宿伊勢丹6階の一角に「レイテニスショップ」をオープンした。「商売にならないでしょうね」と言われたが、ひっきりなしにお客が来て、午後5時半の閉店時間になると本当にくたびれた。友人や知人が通りがかりに寄って行くので、おしゃべりやお茶を飲んだりとそちらも大忙しだった。雑誌「ワールドテニス」が30冊以上定期的に売れ、アメリカのテニスの小物も珍しいと人が集まった。



日本初のテニス学校 伊勢丹テニススクール（1967年 45歳）

プライベートレッスンが主流でグループレッスンは絶対無理と言われたが、ついに夢が実現した。水・土・日の週3日、1回1時間30分。ラーメンが1杯100円の当時、受講料は月1000円「デ杯選手からビギナーまで」をキャッチフレーズに掲げた。申込者が殺到し、小学3年生から社会人・主婦まで、1期生120人が集まった。



翌月の申し込みを伊勢丹のレイテニスショップで受け付けると、エスカレーターやエレベーターで上がったのでは間に合わないと6階のショップまで皆が階段でダダっとなら駆け上がってくる。受付のたびに大騒ぎになるので、四谷警察からお叱りを受けてしまった。2期生は150人と希望者は膨れ上がり、コートを増やし、毎日やるようになった。

翌月の申し込みを伊勢丹のレイテニスショップで受け付けると、エスカレーターやエレベーターで上がったのでは間に合わないと6階のショップまで皆が階段でダダっとなら駆け上がってくる。受付のたびに大騒ぎになるので、四谷警察からお叱りを受けてしまった。2期生は150人と希望者は膨れ上がり、コートを増やし、毎日やるようになった。

初めて稼いだ賞金 4000円 (1968年 46歳)

1968年 プロもアマも同じ土俵で戦い、勝利者は賞金を得るというオープン化が実現した。ニュージーランドで開催の世界最初の賞金大会にテニス仲間5人と出場した。「私たち、賞金が出る最初の大会に出たわ」と喜び合った。貰った賞金は20ドル、円換算でおおよそ4000円だが、嬉しさに変わりはなかった。

日本女子庭球連盟の発足 (1968年 46歳)

1967年11月 田園倶楽部のクラブハウスに70人が集まり、発足会議が始まった。女子も海外で試合をする大切さを理解してもらうには、

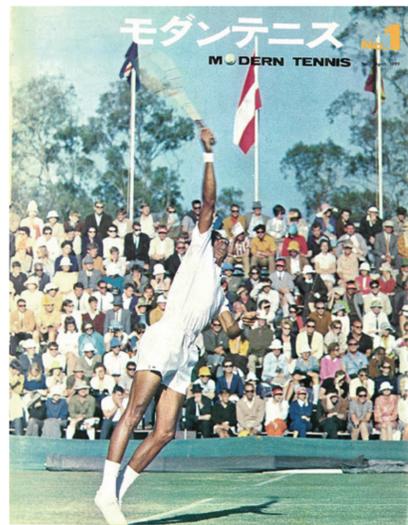


昭和42年11月 田園クラブに桑名・井上・宮城ほか46名の選手が集まり、話し合いが持たれた

団体として発言していかなければ効果はない。

それを表明しに日本協会へ行って、できたのが日本女子庭球連盟（現日本女子テニス連盟）である。

日本最初のテニス誌 モダンテニスの発刊 (1969年 47歳)



指導者や増えつつあるテニスファンに正しい情報を伝えないと日本のテニスはどんどん世界から遅れてしまうとの思いから、雑誌モダンテニスを年4回発行の季刊誌として発刊した。

それから7年、第34号をもって休刊とした。世界の情報を伝えたいという初期の目標は果たせた。

フェデレーションカップ監督就任 (1978年 56歳)

フェデレーションカップは第2回大会に初めて参加したが、その後4年間は不参加、1970年から復帰したが、なかなか勝てなかった。1978年メルボルン、1979年マドリード、1980年西ベルリン、1981年東京、1982年サンタクララと5年間監督を務めた。

1979年 日本チームの強化の一環として、アメリカのエイボン・フューチャーズ・サーキット（アメリカ、カナダの10都市で2週間単位で開催の長丁場の大会）を強化の舞台に選び、4年間アメリカを転戦した。

1980年 野村貴洋子、古橋富美子、柳昌子、佐藤直子の4選手とともに西ドイツに滞在し、イギリスの小さな大会を回る旅をした。

1981年 日本で初開催のフェデレーションカップでのベスト8入りを目指して最後の強化合宿としてイ

タリアのサテライトサーキットに参加（古橋富美子、柳昌子、井上悦子、岡本久美子、岡川恵美子）。

11月多摩川園ラケットクラブで行われた第19回フェデレーションカップでは、目標としたベスト8入りは逃したが、高2トリオと呼ばれた選手たちが、世界のサーキットに出ていくベースにはなった。

1982年 古橋富美子、柳昌子、井上悦子、岡本久美子を連れてアメリカ西海岸のサマーサーキットに参加。

雑誌テニスクラシック・ブレイク編集長 (1980年 58歳)

雑誌テニスクラシック・ブレイクでコラム連載スタート (1994年 72歳)

本「庭球浪漫紀行」発行 (2006年 84歳)

本good days, good years, good life



「宮城黎子の昭和テニス史」 (2008年 86歳)

2008年6月1日 永眠 86歳

引用 日本文化出版(株)「宮城黎子の昭和テニス史」 (2008年5月1日第1刷発行)

テニスミュージアム設立活動

「日本のテニス文化を守り育てる」ためにはテニスミュージアムが必要と提唱し、テニス協会に働きかけ、テニス資料館準備室を発足（2002年）させ、初代委員長に就任する。その後のテニス資料館準備委員会（改称）、現在のテニスミュージアム委員会（改称 2007年）につながる功績を残す。また高額額の寄附により宮城黎子テニスミュージアム基金が設立され、現在の日本テニス協会「テニスミュージアム設立に関わる寄附」の礎となっている。

宮城黎子年譜

西暦	和暦	年齢		主な出来事
1922	大正11	0	生誕	日本庭球協会発足 第1回全日本選手権(男子)
1939	昭和14	17	東日トーナメント初出場 ベスト8	
1941	昭和16	19	東日トーナメント シングルス初優勝	太平洋戦争勃発
1950	昭和25	28	全日本選手権初出場 シングルスベスト4	朝鮮戦争勃発
1951	昭和26	29	全日本選手権 ダブルス初優勝	サンフランシスコ平和条約、日本デ杯に復帰
1952	昭和27	30	全日本選手権 単・複・混 3冠達成	加茂幸子ウインブルドン、全米への初の海外遠征
1955	昭和30	33	朝日生命テニス教室スタート	宮城淳・加茂成成 全米ダブルス優勝
1956	昭和31	34	全日本選手権シングルス8連覇のスタート	
1960	昭和35	38	インドネシア遠征	
1963	昭和38	41	全日本選手権ノード選手を倒して8連覇達成(通算10回)	フェデレーションカップスタート
1964	昭和39	42	全豪シングルス出場 フェデレーションカップ出場	ラケット1本1,600円~3,000円 東京オリンピック
1965	昭和40	43	レイテニスショップ開店(新宿伊勢丹6階)	
1967	昭和42	45	毎日選手権最後の優勝(単複合計37タイトル)	スチールラケットT2000発売
			伊勢丹テニススクール開校	沢松和子史上最年少で全日本選手権優勝
1968	昭和43	46	女子庭球連盟(現日本女子テニス連盟)発足	テニスオープン化の時代に
1969	昭和44	47	モダンテニス発刊	
1970	昭和45	48		全豪でイエローボール(四大大会で初)
1971	昭和46	49	初のウインブルドン観戦	ウインブルドンで初の12ポイントタイブレーク導入
1972	昭和47	50		第1回ジャパンオープン 日本プロテニス協会設立
1975	昭和50	53	モダンテニス休刊(34号目)	テニス用品市場がゴルフを上回る
1978	昭和53	56	フェデレーションカップ日本チーム監督就任~1982	沢松和子全英ダブルス優勝
1979	昭和54	57	アメリカ・カナダを転戦	男子ジャパンサテライトサーキット始まる
				デカラケ本格的に流行
1980	昭和55	58	テニスクラシック創刊 編集長に イギリス転戦	日本庭球協会の財団法人化
1981	昭和56	59	イタリア転戦 初のチェコスロバキア遠征	「財団法人日本テニス協会」に名称変更
1989	平成元	67	レイテニスショップ閉店	伊達公子プロ転向
1994	平成6	72	テニスクラシック誌でコラム連載スタート	
2005	平成17	83	フェデレーションカップ取材にブラハへ	
2006	平成18	84	初の単行本「庭球浪漫紀行」刊行	ジャパンオープン フェデラー初優勝
2008	平成20	86	逝去	